「１９７５年秋・ムーンライダース」

Live Report

text by 吉音家コン吉

kashi no kai

★１９７５年秋・ムーンライダース★

１９７５年の９月１８日と１０月３日に、ムーンライダース（当時は最後のＳが清音で発音され、雑誌等の表記もムーンライダースであつた）のライブを聞きに行つた。場所はいづれも荻窪ロフト。時期としては、翌１９７６年の１月に発売されることになる、鈴木慶一とムーンライダースのデビュー盤“火の玉ボーイ”が録音されてゐたころのライブといふことにならうか。２０年以上も前なので記憶は相当あやしいものだが、幸ひ当時の日記が残されてゐるので、それをたよりに報告することにする。

★ムーンライダースの構成員★

荻窪ロフトに出演したムーンライダースのメンバーは、両日ともこの７名である。鈴木慶一（エレクトリック・ギター）岡田徹（ピアノ）かしぶち哲郎（ドラムス）武川雅寛（ヴァイオリン）椎名和夫（エレクトリック・ギター）鈴木博文（エレクトリック・ベース）土井正二郎（パーカッション）主たる担当楽器は上記の通りだが、曲によつていささか変動する。たとへば、かしぶち哲郎がヴォーカルを取る場合には、かしぶちがドラム・セットの前からピアノの前に移動し、土井正二郎がそのあとに入つてドラムスを担当する。ピアニストの座を追はれた岡田徹は、その他の鍵盤類を演奏するといふ具合である。なほ、土井正二郎は、ムーンライダースの正規のメンバーとして処遇されてゐるやうに客席からは見てとれた。政治的配慮があつたのかどうかは知る由もないが、“火の玉ボーイ”の歌詞カード裏のメンバー表にも、“ＴＨＥ ＭＯＯＮＲＩＤＥＲＳ”の欄にこの７名の名前が記載されてゐるのだから、土井正二郎は単なるサポート・メンバーやアグネス・チャンのツアー要員だけにとどまる存在ではなかつたやうに思へてならない。しかるに、近年のムーンライダーズに関する文献における、土井正二郎関係の記述量はあまりにも少量であつて、その脱退の経緯がどうなつてゐるのかといつた基本的な事項にしても、確認することができないでゐる。あるいはこのあたりに触れるのがタブーになつてゐるのかも知れないから、これ以上は深入りしないでおくが、勇敢な学究の手による詳細な調査報告を読んでみたいやうな気もする。

★演奏された曲目★

９月１８日の日記には“大寒町”“月夜のドライブ”“酔いどれダンス・ミュージック”“紡ぎ歌”“スカンピン”“ネイビー・ブルー”などの曲が演奏されたとあり、また１０月３日の日記には、“大寒町”から“月夜のドライブ”まで十数曲が演奏されたと記録されてゐる。それ以外に記憶に残つてゐる曲は、“リラのホテル”“ウェディング・ソング”“月の酒場”“ウイリアムテル序曲”“塀の上で”などである。９月１８日から１０月３日まで、半月しか経過してゐないし、ムーンライダースとして演奏可能なレパートリーはさほど多くはなかつたはずなので、両日に演奏された曲はほぼ重なつてゐたと考へるのが妥当なところであらう。

さて、これより曲ごとの演奏形態について述べてみたい。

●大寒町●
末期はちみつぱいのレパートリーになつてゐた曲。岡田徹がアコーディオンを弾いてゐたやうに記憶してゐる。メインのヴォーカリストは鈴木慶一。なほ、この曲を最初に音盤化したのは、あがた森魚（１９７４年４月発売の“噫無情”に所収）である。

●月夜のドライブ●
これもはちみつぱいの曲。駒沢裕城のペダル・スチールがないと、ちと物足りない感じがする。１０月３日のアンコール曲。

●酔いどれダンス・ミュージック●
これまたはちみつぱいのころから聴いてゐる曲。その後、ステージ上で変態を重ねることになるが、このころは、まだはちみつぱいバージョンに近かつたやうだ。

●スカンピン●
末期はちみつぱいのライブで断片的に歌はれてゐるのを聴いたことがある。しかし、フル・コーラス版はこのライブが初聴。アレンジに関してはまつたく記憶がない。

●ネイビー・ブルー●
武川雅寛がヴォーカルをつとめる武川曲だつた。歌詞が途中までしかできてゐないといふことで、あつといふ間に終はつてしまつた。その後、完成したのかどうか、寡聞にして知らず。

●リラのホテル●
かしぶち哲郎がピアノを弾きながら歌ふ。ドラムスは土井正二郎。岡田徹はアコーディオン担当だつたと思ふ。思はず息を呑んだのは武川雅寛と椎名和夫のツイン・ヴァイオリンの旋律の美しさで、荻窪ロフトの昔の小学校で使つてゐたやうな小さな木の椅子の上で、居住まひを正してしまつた。このツイン・ヴァイオリンは、翌１９７６年の１月に発売されたあがた森魚の“日本少年”所収の同曲で聴くことができる。土井正二郎のドラムスは堅実で、耳障りなところもなく、ムーンライダースの中にあつて、まつたく違和感が感じられなかつた。かしぶち哲郎のドラムスを叩きながらのヴォーカル（はちみつぱい時代の“釣り糸”など）には、幾分窮屈なところが感じられたものだが、ピアノを前にしたかしぶちは、声ものびやかで、気持よく聞けた。

●紡ぎ歌●
音盤化は１９７７年２月発売の赤盤“ＭＯＯＮ ＲＩＤＥＲＳ”まで待たなければならなかつたが、この時期にもうすでに演奏されてゐたのである。やはりかしぶちピアノ、土井ドラムスの線であつた。かしぶち曲では鈴木慶一が余剰人員となり、ステージの奥で独り客席に背を向け、時折シンセサイザーの大仰な音を発してゐたやうに記憶してゐる。

●ウェディング・ソング●
どちらの日だつたかは記憶にないが、岡田徹がヴォーカルを担当した。鈴木慶一曰はく、“今日は岡田くんのお母さんがいらしてゐるので、岡田くんに歌つてもらひます。”と。ライブ参観日だつたのである。岡田徹はカレーうどんに頼ることなく、可憐な声で歌つた。なほ、そのころの岡田徹はロボコンとも呼ばれてゐた。

●月の酒場●
鈴木博文がベースを弾きながら歌ふ。１９８６年９月に発売されたムーンライダーズのワースト盤所収の同曲の演奏と似たやうな感じであつた。

●ウイリアムテル序曲●
冗談音楽系の曲。導入部の旋律は片手にコップを持つた鈴木慶一の喉を使つたうがひ音でゴロゴロと奏でられ、そこに武川椎名のツイン・ヴァイオリンが突つ込むといふにぎやかさ。ドラムスやベースも大音量で参入し、祝祭的色彩に満ちた演奏であつた。つまり、おめでたい感じであつた。

●塀の上で●
９月１８日のアンコール曲。レパートリーは出しつくしたといふことで、客席からリクエストを募つたところ、まづ“薬屋さん！”と声がかかつた。このはちみつぱいの難曲は、鈴木慶一の“コードを忘れちやつた。”の一言で、あつさり却下される。そこで“塀の上で”といふことになつたが、鈴木博文が、“俺、この曲弾けない。”などと不人情なことを言ふので、急遽、武川雅寛がベースを抱へる。結局鈴木慶一がピアノ、かしぶち哲郎がドラムス、武川雅寛がベースといふタイトな編成で始まり、途中から椎名和夫のギターがおつきあひ程度で参加する。この時の鈴木慶一のヴォーカルが、ハイ・テンションでよかつた。おまけで得をした気分で帰途についたのである。

★附記★
以上、見てきたことを見てきたやうに書き連ねたが、昔のことゆゑ、事実誤認が多々あることと思はれる。往事を知る諸賢の訂正を切に求める次第である。

※(**樫の会** HP 掲載 1999.2.1)
※HP 掲載に当たりオリジナル原稿より改行位置変更させて頂きました。
（**樫の会** KRAFT.WARTZ)